紀　　要

第　22　号

２００９．３

財団法人滋賀県文化財保護協会

渡　来　人　の　墓
―志賀古墳群と一須賀古墳群―

堀　　真　人

１．はじめに

近江における横穴式石室は、おおむね６世紀前半代に首長墓に加え、中小規模墳にも導入される。それには、様々な系譜の石室が展開されていくことが知られている。その系譜とは「畿内型」といわれる石室、「ドーム状石室」といわれる石室、「階段式石室」といわれる石室である[1]。

この中で「ドーム状石室」を持つ横穴式石室は、①玄室平面プランが方形や横長長方形のプランを持つ両袖式や右片袖式の石室、②奥壁、側壁の持ち送りが急で天井石を１～２石配置する、③玄室の幅に対して羨道の幅が比較的狭いことなどの共通した特徴がみられる一群である。分布域は大津市の北郊を中心とした湖西南部に集中しているが、湖北町四郷崎古墳・米原市磯崎２号墳・彦根市荒神山古墳群山王谷支群1号墳などの他地域にも点的分布をみせる。大津市大通寺41号墳がTK47段階につくられ、その後大津北郊地域の群集墳内において採用されていく。

この古墳群を花田勝広氏は、特有の石室、ミニチュア炊飯具・釵子の副葬、周辺地域においてオンドルや大壁住居を採用する集落の存在などから、渡来系氏族の存在を考古学的な資料を積み重ねて結論付けている[2]。また、近年では石室の平面プランや壁面構成を中心にした石室の構築技術の観点から、古墳群内の広範な築造規定の存在が明らかにされつつある[3]。

本稿では、渡来系氏族の奥津城とされる大津北郊地域に所存する群集墳内の大谷古墳群を、石室導入期と位置付け、それを大阪府に所存する一須賀古墳群の導入期の石室との対比・検討から両者の関係を明らかにすることを目的としている。

２．大谷古墳群の検討

(1) 大谷古墳群の特徴の整理

まずは名称の整理をおこなっておきたい。比叡山東麓の大津市錦織から坂本に至る地域に展開する古墳群（埋蔵文化財包蔵地としての単独古墳・遺跡も含める）は30ケ所を数え、総数は600基を超える。20基程度から150基を超える大規模な古墳群が、距離にして６km足らずの限られた地域の丘陵斜面や扇状地上に展開している。本稿では、これらの埋蔵文化財包蔵地である「○○古墳群」群を統括する名称として「志賀古墳群」を使用することにする（図1）。そして、個々の古墳群は、大古墳群内で支群的な位置を占めるものと理解しておきたい。ここで取り上げる「大谷古墳群」は、埋蔵文化財包蔵地「大谷遺跡」にあたる。埋蔵文化財包蔵地「大谷古墳群」は、「大谷遺跡」の南西側の丘陵地に所在するが、「大谷遺跡」内で展開する古墳は、同一の古墳群として認識できるとの判断から「大谷遺跡」内の古墳＝「大谷古墳群」として使用することとする。

「大谷遺跡」は大津市滋賀里に所在する遺跡で、昭和60年に実施された防衛施設局大津宿舎建設に伴う調査で３基[4]、国道161号バイパス建設に伴う調査で４基の横穴式石室墳がみつかっている。この中で注目したい古墳は１号墳・３号墳・４号墳[5]である（図2・5）。

１号墳　玄室の幅２m、長さ3.3m、羨道幅１m、長さ1.7mを測る右袖式の石室である[6]。石室を構築するための掘方はほぼ羨門部で終了しており、閉塞石を玄門部から積み上げている。石室は４～５段が残存しており、石材を横方向に小口積みをしている。袖部は１石の単列積みである。遺物は、玄室から土師器の甕１点、須恵器の壺３点、銅製の釵子１点が出土している。鉄釘が中央から右側中心に57点出土していることから、木棺が設置されていたものと考えられる。

３号墳　玄室の幅２m、長さ3.2m、羨道幅１m、長さ１mを測る右袖式の石室である。閉塞石は玄門部から積み上げており、石室を構築するための掘方はほぼ羨門部で終了している。石室は４～５段が残存しており、石材を横方向の小口積みにしている。袖部は２石の並列積みである。遺物は、玄室内から土師器の甕３点、須恵器の壺１点、ミニチュアカマド１点が出土している。鉄釘が玄室全体から約35点出土していることから、木棺が設置されていたものと考えられる。土師器の甕１点と須恵器の壺１点は、石室の奥壁左側隅で原位置を保って出土している。

４号墳　玄室の幅2.1m、長さ3.3m、羨道幅１m、長さ2.3mを測る右袖式の石室である。石室を構築するための掘方は後世の撹乱のため羨門部側の範囲が不明である。閉塞石は玄門部から60㎝羨道側で積み上げている。石室は３～５段が残存しており、石材を横方向の小口積みにしている。袖部は2石の並列積みである。遺物は、玄室内から土師器の甕１点、須恵器の壺３点、銀製釧１点、銅製釧１点が出土している。鉄釘が石室全体から50点出土していることから、木棺が設置されていたものと考えられる。土器類は奥壁左側隅でまとまって出土している。

大谷1･3･4号墳の特徴を整理すると以下のようになる。
①石室の平面プランが非常に類似している。
②石室を構築する石材が横方向の小口積みで整美な仕上げである。
③出土している遺物が壺・甕が中心である。

①に関しては、先行研究があり[7]、同一プランを示す古

図1　志賀古墳群分布図（S=1/50,000）

墳として辻川氏は大谷１・３号墳と穴太飼込６・20号墳、大通寺39号墳、福王寺18号墳、太鼓塚27・29・33号墳、真葛原古墳の８例を挙げている。そのうえで遺存状態の良い石室の石材の積み方の比較検討を行い、大谷１・３号墳→穴太飼込20号墳→太鼓塚29・33・27号墳→真葛原古墳の変遷を明らかにしている。

②の特徴は、志賀古墳群内でも類例が見当たらず、特異な状況を示している。

③は報告者も指摘しているように、遺物がすべて埋葬時の状況を示しているわけでないながら、原位置として認識できる３号墳例をみる限り妥当性が高いと考えられる。それは①で示した１・３号墳と同型平面プランを持つ石室群においても、遺物の出土状況が明らかなものでは、同様の傾向を示していることからも肯定できるだろう。以下の通り、これらの石室は出土している遺物のみならず、遺物の配置場所においても一定の共通性を見出すことができる（図5）。

大通寺39号墳　玄室内の遺存状況は悪い。床面からは土師器の甕が１点出土している。

太鼓塚27号墳　玄門部付近が撹乱を受けているものの、42本の鉄釘の出土状況から、右袖側で主軸に並行して２棺置かれていたことが推定できる。遺物は奥壁左隅に土師器の甕１点と須恵器の壺２点が出土しているのみである。

太鼓塚29号墳　玄室床面の遺存状態は良好である。右袖側に集中している20本の鉄釘から、主軸と並行して１棺置かれていたことが推測できる。遺物は奥壁左側隅から土師器の壺１点、甕１点、須恵器の壺５点が集中して出土している。左側壁中央付近でミニチュアの甕が出土している。

太鼓塚33号墳　玄室床面の遺存状態は良好である。右袖側に集中している18本の鉄釘から、主軸と並行して１棺置かれていたことが推測できる。遺物は奥壁左半分に土師器の甕１点、須恵器の高杯・提瓶・横瓶・瑤・壺４点が、左側壁中央部付近から土師器の高杯、須恵器の蓋杯９点とやや離れた地点からミニチュアの竈と甕が出土している。

これらから、同一のプランを共有する石室群が、一定の規則に沿った遺物の内容・配置を示していることが明らかであろう。それは、奥壁左隅に壺・甕を配置するという規則である。

（２）大谷古墳群の時期的な位置について

そうであるならば、この同一プランを示している一群の中でもっとも古相に位置付けられている大谷古墳群1・3・4号墳の築造時期はいつであるかが、共通の平面プラン・土器副葬方法の祖源を知る上で重要となってくるだろう。出土している遺物からは、先述した③の理由で明確な時期の決定を困難にしている。では、②の特徴から石室の壁面の構築方法から時期を限定することができないであろうか。辻川氏が検討している同型プランの石室の壁面石材構成・構築法の比較からおおむねTK10段階以前に置くことが可能であろう。しかし、大谷1・3・4号墳の前後関係は明らかではない。そこで、近年、畿内の横穴式石室の構成要素の属性分析から一定の時期的変遷が追えることが明らかにされ[8]、それを応用して、近江地域のドーム型石室墳の時期変遷を明らかにした藤村氏の業績[9]を参考にして時間的な位置を決めていきたい。

属性分析において、時間的変遷が最も明瞭に反映される部位として、袖部があげられる。大谷１号墳の袖部は横位石材１石上に２石の石材を、そしてその上に横位の石材１石の３段積みが確認できる。３号墳は横位の石材２列が３段目まで確認できる。同様に４号墳も横位の石材２列が３段まで確認できる。藤村氏によれば横位の石材で袖部を構成する場合２列→１列の流れが読み取れるとしている。それに従えば、３・４号墳→１号墳となりそうである。そして、羨道がやや長いことや袖部の石材構成において単列化への流れがみられることを評価するならば３号墳→４号墳→１号墳となるであろう（図2）。

さらに、この順序は鉄釘の長さの変化からも肯定できると考えられる。志賀古墳群の鉄釘の長さの大まかな変遷は、TK47 ～ TK43段階までは全長15cmを越える大型品で、中でもTK10段階前後には20cm前後のものが使用される。そして、TK209段階以降10cm以下のものに変化するとされている[10]。そこで、鉄釘が出土している石室を概観してみると、鉄釘の全長を確認できるものは20例ある。その主なものをみてみると

TK47段階	穴太飼込16号墳	12 ～ 14cm	14cmピーク
	大通寺41号墳	16 ～ 19cm	16cmピーク
MT15段階	福王寺２号墳	16cm・20cm	
	福王寺６号墳	17cm	
TK10段階	大通寺37号墳	16 ～ 23cm	20cmピーク
	穴太飼込15号墳	16 ～ 23cm	19cmピーク
MT85段階	太鼓塚33号墳	12 ～ 19cm	15cmピーク
MT85 ～ TK43段階	太鼓塚29号墳	11 ～ 18cm	18cmピーク
TK209 ～ 217段階	太鼓塚20号墳	15cm	
	太鼓塚22号墳	12cm	
TK217段階	太鼓塚21号墳	7 ～ 11cm	8cmピーク
	太鼓塚25号墳	7 ～ 9cm	8cmピーク

これらから、おおむねTK47段階で10cmの前半代、MT15段階で10cmの後半代の長さになり、TK10段階で20cm前後、MT85 ～ 43段階で10cmの後半代、TK209段階で10cmの前半代、TK217段階で10cm以下を基本とし、漸移的に鉄釘の全長が変化していることがわかる。これを大谷１・３・４号墳にあてはめてみると（図3）、大谷１号墳は15 ～ 19cmの幅で17cmにピークが、大谷３号墳は13 ～ 17cmの幅で17cmにピークが、大谷４号墳は14 ～ 19cmの幅で16cmにピークがある。すでに石室の袖部の形状から３・４号墳→１号墳の順がわかっており、ピークとなる釘の長さは逆転しているものの、長さの分布幅は短いほうに振っている

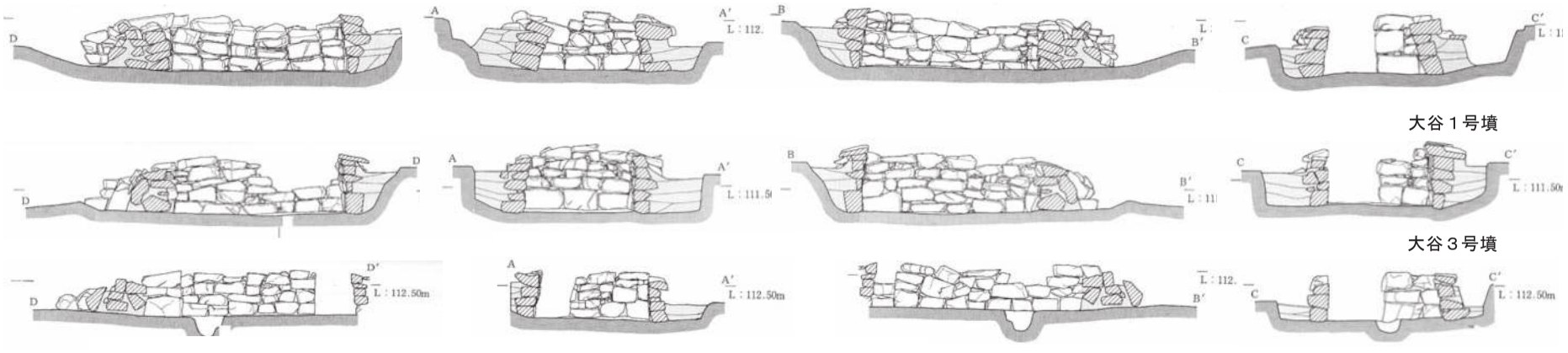

図２　大谷古墳群壁面（S=1/100）

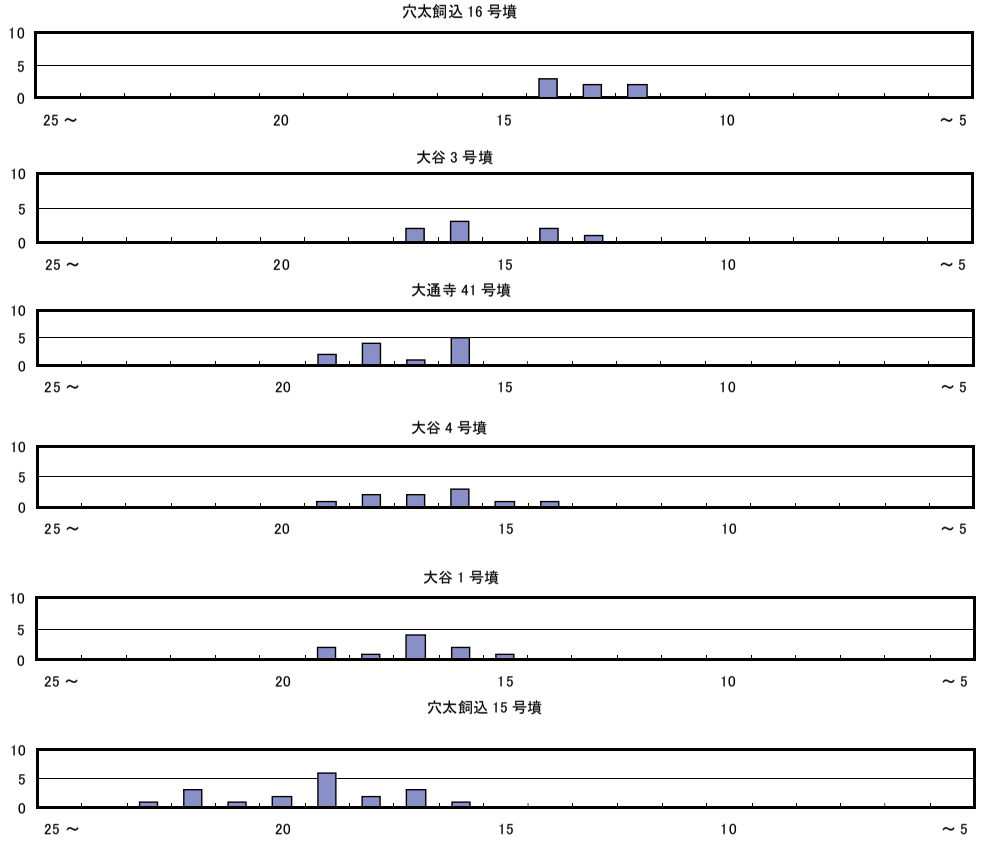

図３　志賀古墳群における鉄釘法量分布
（縦軸：本数　横軸：長さ㎝）

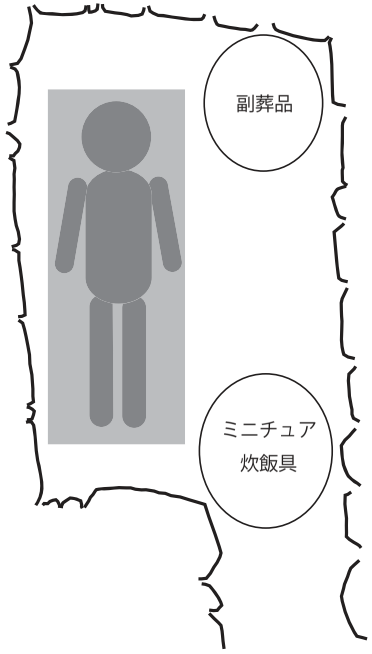

図４　志賀古墳群における埋葬原理

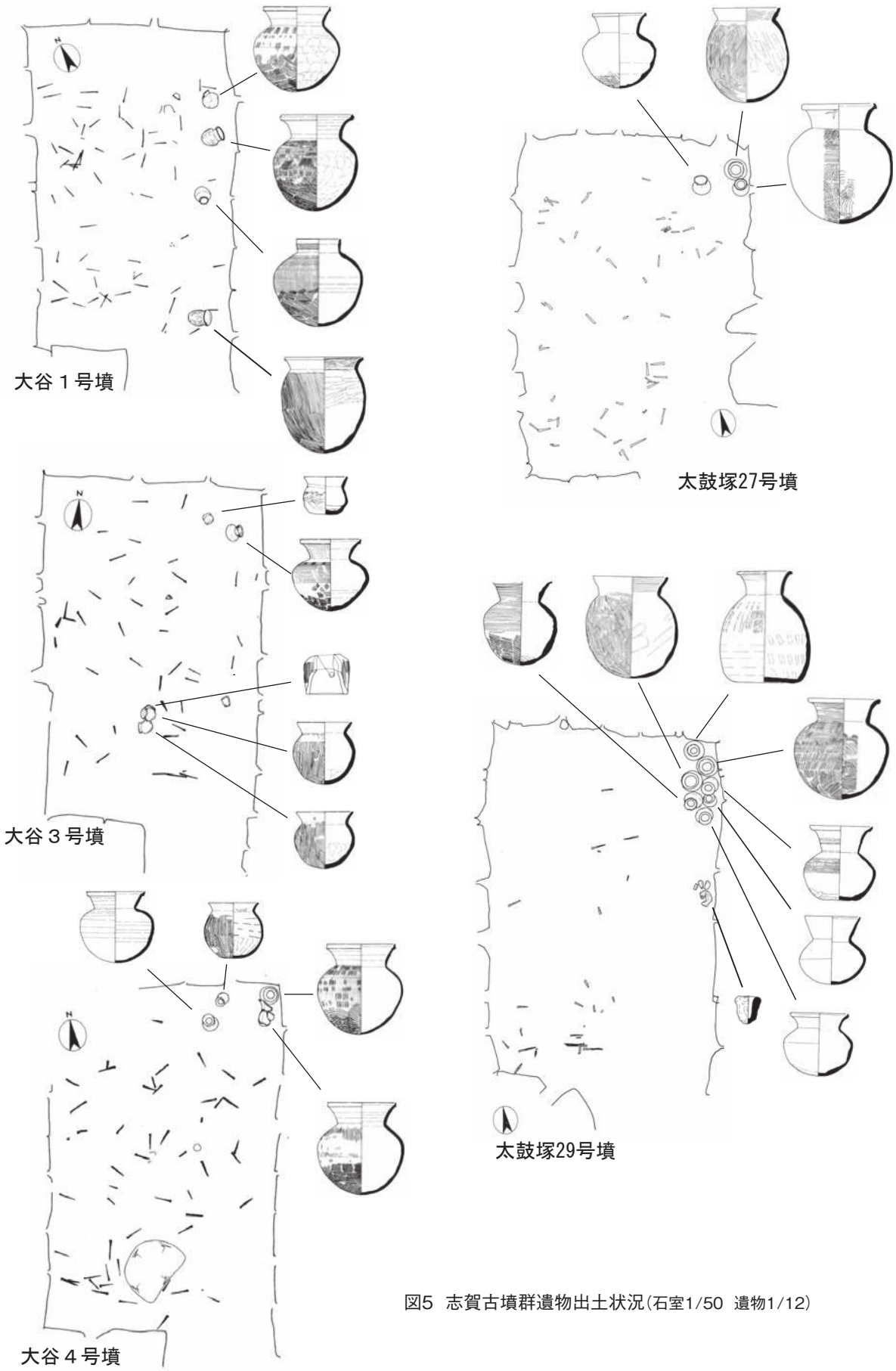

図5　志賀古墳群遺物出土状況(石室1/50　遺物1/12)

３号墳が４号墳より古い傾向を示していることがわかる。そして、あくまでも傾向としてではあるが、３号墳は大通寺41号墳より古い傾向を示し、４号墳は大通寺41号墳とほぼ同じ傾向であることを指摘することができる（図３）。

では、具体的な時期を導くとするならば、比較の対象となるのは、右片袖式で袖部を２石並列の複数積みで構築している石室の時期であろう。志賀古墳群内で２石並列の複数積み石室を検索してみると、福王寺2号墳・６号墳、大通寺38号墳・39号墳・41号墳が該当する。これらの古墳からの出土須恵器の時期をみてみると、大通寺41号墳がTK47段階、福王寺2・6号墳、大通寺38・39号墳はMT15段階に相当する。これを参考にするならば、大谷3・4号墳はTK47～MT15段階、袖部を単列複数積みで構成する1号墳はTK10段階としておくのが妥当と判断できる。このことは、大谷1・3・4号墳が志賀古墳群内でも導入期の石室であることをしめしている。

３.一須賀古墳群Ⅰ支群について

一須賀古墳群は、大阪府南河内郡河南町に所在する古墳群である。八尾市の高安古墳群、柏原市の平尾山古墳群とならぶ河内地域の大群集墳の一つとして知られており、約250基が確認されている。副葬品にはミニチュア炊飯具・釵子・韓式系土器・金製垂飾付耳飾などが含まれており、渡来系集団を含む被葬者が想定されている。一方で志賀古墳群とは異なり、支群間で副葬品や石室規模などに明確な階層差を認めることができる。また、河内地域における石室導入期には多様なタイプの石室が作られるのだが、６世紀中頃から後葉になるといわゆる畿内型石室に移行し、斉一化していくという[11]。

この一須賀古墳群内における導入期の横穴式石室[12]の代表格としてⅠ支群の石室群をあげることができる（図6）。Ⅰ支群は両側に谷が迫る細長い低平な丘陵部に位置し、１～３基単位で小支群を形成している。低平な丘陵であることから後世に水田がつくられ、階段状に造成されたため、調査古墳の遺存状態は悪く、墳丘はほとんど削平されている。そのため主体部である横穴式石室も基底部から２～３段程度が残存する例がほとんどである。Ⅰ支群の特徴としては、調査された18基中４・６・８・12・14～21号墳の12基が６世紀前葉に属する導入期の横穴式石室であること、小型の割石を小口積みし、右袖式の石室で短い羨道が取り付くという共通した石室形態をしめしていることがあげられる。また、副葬品においても銀製指輪・銀製釵子・ミニチュア炊飯具などの渡来系遺物がみられる。これらの特徴は、志賀古墳群のありかたとも重なる部分が多いことは、すでに指摘されていることであるが[13]、ここでは、さらにもう一つの共通項を指摘しておきたい。それは副葬品配置である。筆者は、以前、志賀古墳群の分析を通して古墳群内に埋葬原理というべきルールが存在していることを指摘した[14]。それを要約すれば、①遺骸の埋葬位置は石室の右側（右袖）を第一とし、頭部を奥壁側に向ける②副葬品は遺骸の左上側（奥壁左隅）に置く③ミニチュア炊飯具は玄門部付近から左壁中央に置くというものである（図4）。この中で、一須賀古墳群Ⅰ支群において注目したいのは②の副葬品の配置である。そこで、石室内の遺骸・遺物の配置が判明した例を中心にみていきたい（図7）。

一須賀Ⅰ４号墳　石室を構築する石材の大半が遺存しないが、玄室長3.3m、幅1.7mに復元できる右袖式の石室である。鉄釘や鋏の出土位置から主軸に並行で２棺置かれていたことがわかる。右棺からは銀環が奥壁側の原位置で出土していることから、頭部は奥壁を向いていたことがわかる。副葬品は奥壁左隅付近から須恵器の広口壺・高杯、土師器の高杯・把手付鉢が出土している。

一須賀Ⅰ６号墳　石室を構築する石材の大半は遺存していないが玄室長2.5m、幅1.4mに復元できる右袖式の石室である。鉄釘の出土位置から右袖部寄り、主軸に並行して１棺置かれていたことがわかる。副葬品は復元木棺の左側奥壁から須恵器の脚付有蓋壺、耳付有蓋短頸壺、有蓋短頸壺が出土している。

一須賀Ⅰ12号墳　玄室長3.1m、幅1.6m、羨道長1.5m、幅0.9mの右袖式の石室である。鉄釘の位置から右袖側、主軸に並行する位置に１棺置かれていたことがわかる。副葬品は、原位置を保っていない銀環が石室中央やや奥壁寄りで出土している。また、左側壁中央で須恵器の広口壺が原位置で出土している。

一須賀Ⅰ16号墳　玄室長3.4m、幅1.7m、羨道長1.7m、幅0.8mの右袖式の石室である。鉄釘の位置から右袖側、主軸に並行して１棺置かれていたことがわかる。副葬品は奥壁左隅から須恵器の広口壺が出土している。

一須賀Ⅰ19号墳　玄室長3.1m、幅1.7m、羨道長1.6m、幅0.8mの右袖式の石室である。鉄釘の位置から玄室右寄り、主軸に並行して２棺置かれていたことがわかる。また銀製釵子が奥壁側で出土していることから頭部が奥壁側であったものと思われる。他の副葬品は、奥壁左隅から須恵器の広口壺とミニチュアの甕が、右袖付近からミニチュアの竈と甕が出土している。

一須賀Ⅰ21号墳　玄室長3.2m、幅1.6m、羨道長1.2m、幅0.8mの右袖式の石室である。鉄釘の位置から右袖側、主軸に並行して１棺置かれていたことがわかる。副葬品は奥壁左隅から須恵器の広口壺、土師器の長頸壺、小型甕３点が原位置で出土している。

これらの例をみると共通項を指摘することができる。それは①遺骸の埋葬位置は玄室の右袖寄り、主軸に並行していること、②副葬品の配置が奥壁左隅（棺の左奥壁側）であることである。①はすべての例ではないながら耳環・釵子の位置から頭部が奥壁側である可能性が指摘できる。②は副葬品がⅠ４号墳を例外とすれば須恵器・土師器を問わず貯蔵具のみであることが指摘できる。そして、①②の共

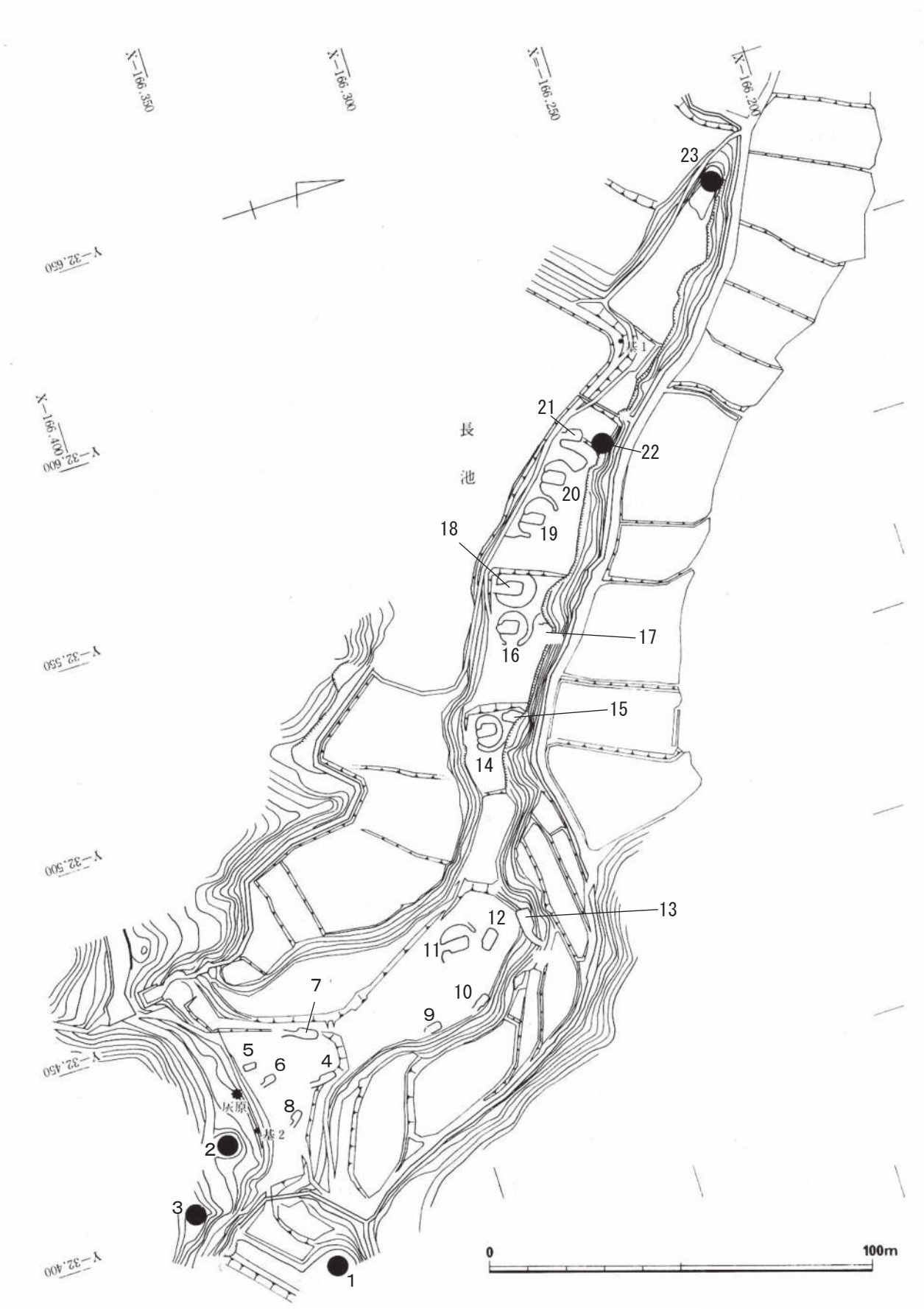

図6　一須賀古墳群I支群分布状況（S=1/1,500）

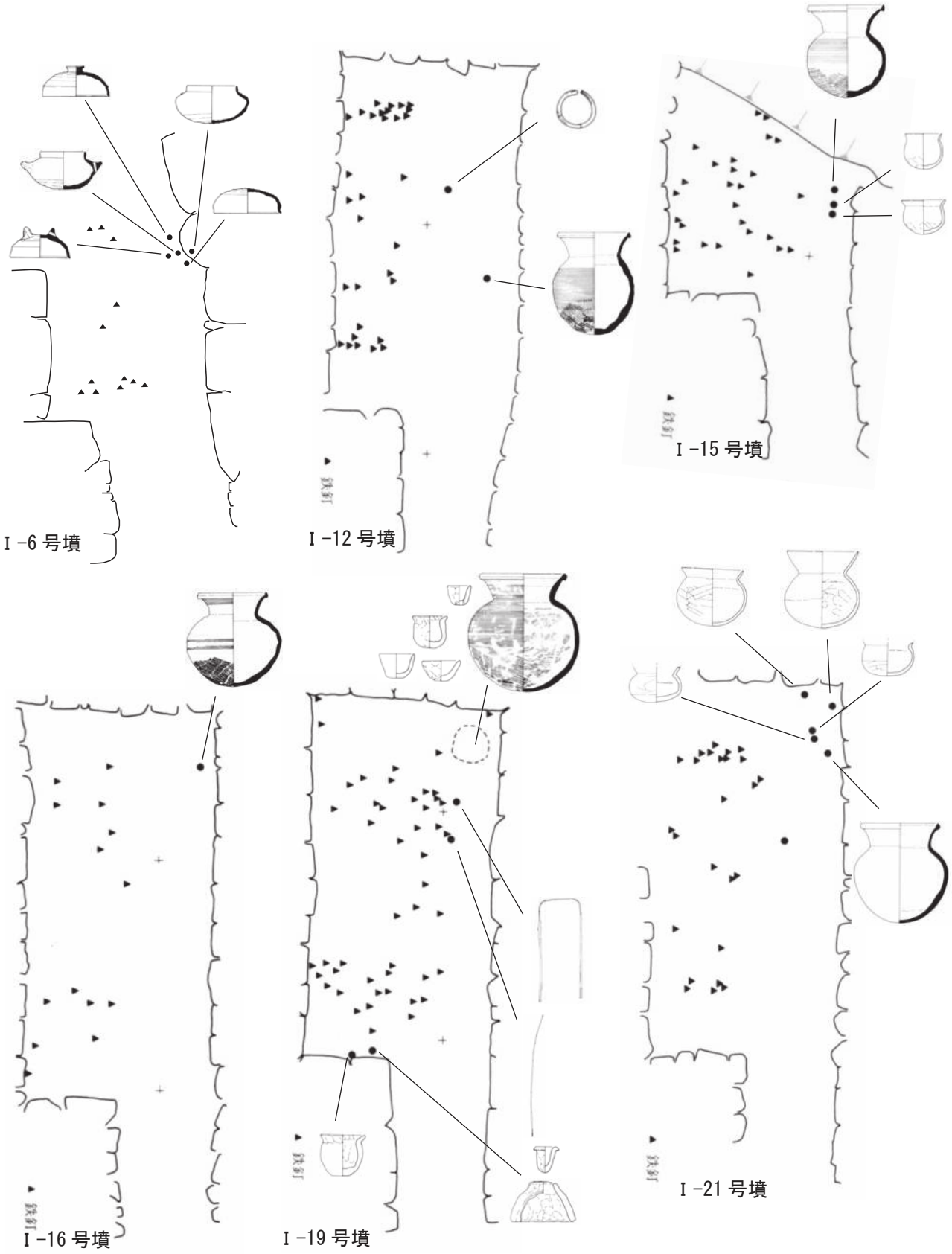

図７　一須賀古墳群遺物出土状況（石室 1/50：遺物 1/10）

通の特徴を持つ古墳が例外なく導入期の石室であることは重要な点である。

４．志賀古墳群と一須賀古墳群

ここまで、志賀古墳群において大谷古墳群が、近江における導入期の石室である可能性が高いことを明らかにしてきた。さらにそれを明らかにする過程で、大谷1・3号墳と同一の石室平面プランを持つ古墳において、副葬品の配置・内容が非常に類似していることがわかった。それを再度整理してみると、①副葬品は須恵器・土師器を問わず貯蔵具である壺・甕であること、②副葬品の配置は原位置を保っていると判断できるものでは奥壁左隅に集中していることの２点である。

一方、一須賀古墳群のⅠ支群を検討してみた結果、導入期に位置付けられる石室に共通する特徴を見出すことができた。それは①遺骸の埋葬位置は玄室の右袖寄りに主軸に並行していること、②副葬品の配置が奥壁左隅（棺の左奥壁側）であり、その内容は貯蔵具中心であることの２点である。このうち①は志賀古墳群において同様であることがわかっている。そして②は大谷古墳群分析を通じて明らかになったことと共通していることがわかる。

これらは、従来から両古墳群は、渡来系遺物（ミニチュア炊飯具セット・釵子・金属製の指輪や釧などの装身具）の存在等から渡来人の奥津城として指摘されてきたが、それらの共通項以上に重要な共通点として評価したい。それは遺物のような移動可能なものではなく、副葬品の配置といった埋葬習俗にかかわる領域における共通点であり、「もの」の移動と比較してより高い次元で関係している可能性が高いと考えられるからである。具体的には、集団（人）の移動が想定できよう。この点に関しては、ミニチュア炊飯具の形態の特徴や石室の構造などの類似性から指摘はされてきた[15]が、その可能性をさらに高める事象と評価したい。そして、その共通する特徴が、志賀古墳群・一須賀古墳群ともに導入期の石室に認められる事象である点は非常に興味深い。志賀古墳群において副葬品の内容が、時期が下るにしたがい貯蔵具のみから、杯や高杯といった供膳具を含めた組成に変化していっているものの、ほぼ一貫してこの特徴を持続しているが、一須賀古墳群においては、導入期の石室で顕著にみられるのみである。これは、花田氏が一貫して独自性をして石室形態・副葬品の両方で保持しえた志賀古墳群、導入期を除くと副葬品のみでしか独自性を残すことができなかった一須賀古墳群と対比した指摘が端的に示しているだろう[16]。

５．まとめにかえて

志賀古墳群と一須賀古墳群において横穴式石室導入期の古墳において非常に類似した様相がみられることが判明した。そこで、これらを再度整理し、その評価をもってまとめとしたい。

①石室プランの共有＋葬制の共有が認められる。

②横穴式石室導入期において共通の葬制が存在した可能性がある。

③当初存在した葬制が持続する志賀古墳群と導入期から隆盛期に至って当初の葬制が変化してしまう一須賀古墳群といった違いが存在する。

①については、志賀古墳群では同一石室プランをもつ古墳においては葬制が共通していることから明らかである。一須賀古墳群においても、高井田山古墳石室をモデルとした「高井田山型」石室と称される一群[17]にⅠ支群の石室は想定されており、一定の石室プランと葬制が相関する点で同様のあり方を示していると考えられる。そして、石室形態の共有と葬制の共有は、被葬者集団の出自を示している可能性が高いと考えられる。しかし、この葬制の中心をなしている壺・甕といった貯蔵具を中心に副葬する習慣の系譜を明らかにすることは出来ない。ただ、石室内に土器を副葬する過程について言及した土生田氏が、渡来人の墓と指摘している[18]福岡県甘木市の池の上・古寺墳墓群[19]の棺内への副葬土器に共通点がみられることは非常に興味深い。埋葬施設・副葬位置の差異などがあり単純に比較することは出来ないが、参考となる事例であると考えている。

②では志賀古墳群における大谷古墳群、一須賀古墳群におけるⅠ支群は、ともに小古墳でありながら地域・古墳群中の導入期の横穴式石室に位置付けられることから、横穴式石室の採用は「横穴式石室」というハード面のみならず「葬制」というソフト面も合わせて存在したことを示している。しかし、それは横穴石室導入期の古墳にすべてみられる事象ではないことから、横穴式石室導入期の複雑な系譜関係に起因するものであろう。③は古墳群の被葬者集団のあり方を端的に示していると考えられる。「畿内型」とよばれる石室が６世紀後半から爆発的に普及していく中、石室というハード面、葬制というソフト面ともに保持していくことができたのが志賀古墳群であり、それが出来ず副葬品の一部にのみにその葬制の一端を留めたのが一須賀古墳群であるといえる。横穴式石室導入期から「畿内型」石室の普及の大波の中での葬制の維持と変化は、炊飯具形土器出土古墳を中心に土器副葬について検討を行なった寺前氏の指摘[20]とも重なってくる。

従来から、渡来系遺物の存在をもって両古墳群ともに被葬者を渡来人であると想定されてきたが、それが葬制というソフトの面からも指摘することが可能となった。さらに、個別に語られてきた渡来人の墓が、ソフト・ハードの両面の共通項を持つことから、出自を共通とする被葬者集団をも想定することが可能となったといえるだろう。

（ほり まさと）

註

(1) 田中勝弘「近江における横穴式石室の受容と展開」『紀要』第

１号　滋賀県立安土城考古博物館1993
辻川哲朗他「近江の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会2007
⑵　花田勝広「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』39巻4号 考古学研究会 1993
⑶　辻川哲朗「横穴式石室の検討」『穴太飼込古墳群』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 2006
森智美「構築技術からみた湖西南部の横穴式石室」『考古学論究』小笠原好彦先生退任記念論集 2007
藤村翔「近江の横穴式石室－窮隆頂持ち送り式石室」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会 2007
⑷『埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書Ⅱ』大津市埋蔵文化財調査報告書（12）大津市教育委員会 1987
⑸『大谷遺跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書（25）大津市教育委員会 1994
⑹　ここでの袖部を含めた石室の左右は、奥壁側から玄門方向をみての左右で統一することとする。
⑺　前掲（3）辻川論文
⑻　太田宏明「『畿内型石室』の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』第46巻第１号 1999
太田宏明「畿内地域における導入期の横穴式石室」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』上巻 2003
太田宏明「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』15 2003
⑼　前掲（3）藤村論文
藤村翔『近江地域の横穴式石室』古墳時代研究会例会レジュメ 2008
⑽　大崎哲人・中村ますみ「木棺の鉄釘についての検討」『大通寺古墳群』一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う発掘調査報告書 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1995
⑾　花田勝広「一須賀古墳群の検討」『滋賀考古』11号 1994
⑿　前掲（8）太田（2003）論文
⒀　花田勝広「河内・大和・近江の渡来人－集住と移動－」『究班』Ⅱ 埋蔵文化財研究会 2002
⒁　堀真人「横穴式石室の葬送原理を考える－志賀古墳群を中心に－」『龍谷大学考古学論集Ⅱ』龍谷大学考古学論集刊行会 2009予定（印刷中）
⒂　前掲（14）
⒃　前掲（14）
⒄　一瀬和夫「近畿地方」『横穴式石室の世界』季刊考古学第45号 雄山閣出版 1993
⒅　土生田純之「北部九州における初期須恵器と古墳」『黄泉国の成立』学生社 1998
⒆『池の上墳墓群』甘木市文化財報告第5集　甘木市教育委員会 1979
『古寺墳墓群』甘木市文化財報告第14集　甘木市教育委員会 1982
『古寺墳墓群Ⅱ』甘木市文化財報告第14集　甘木市教育委員会 1983
⒇　寺前直人「ヨモツヘグイ再考－古墳における飲食と調理の表象としての土器－」『待兼山論叢』第40号史学篇 2006

なお、時期設定については以下の文献を参考にした。

田辺昭三『陶邑古窯址群』研究論集第10号 平安学園考古クラブ 1966・田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981を参照している。また、本文や図版中で取り上げている古墳は以下の文献を典拠としている。

大谷古墳群『大谷遺跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書（25）大津市教育委員会 1994
大通寺古墳群『大通寺古墳群』一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う発掘調査報告書　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1995
福王寺古墳群『滋賀県文化財調査報告書第４冊　大津北郊における古墳群の調査（1）』滋賀県教育委員会 1969
「大津市南滋賀大伴遺跡発掘調査報告」『昭和60年度滋賀県文化財調査年報』1987
『榿木原遺跡発掘調査報告Ⅲ』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1981
太鼓塚古墳群『滋賀里・穴太地区遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大津市文化財調査報告書（12）大津市教育委員会 1980
『太鼓塚遺跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書（19）大津市教育委員会 1992
穴太飼込古墳群『滋賀里・穴太地区遺跡発掘調査報告書Ⅱ』大津市文化財調査報告書（5）大津市教育委員会 1982
「穴太飼込古墳群」『緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 2004
「穴太飼込古墳群」『主要地方道伊香立浜大津線道路改築事業に伴う発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 2006
穴太野添古墳群『滋賀県文化財調査報告書第４冊　大津北郊における古墳群の調査（1）』滋賀県教育委員会 1969
一須賀古墳群『一須賀古墳群資料目録Ⅰ』大阪府教育委員会 1992
『一須賀古墳Ⅰ支群発掘調査概要』大阪府教育委員会 1993
『一須賀古墳群の調査』大阪府立近つ飛鳥博物館図録21 大阪府立近つ飛鳥博物館 2000
『一須賀古墳群の調査Ⅱ』大阪府立近つ飛鳥博物館図録23 大阪府立近つ飛鳥博物館 2000
『一須賀古墳群の調査Ⅲ』大阪府立近つ飛鳥博物館図録26 大阪府立近つ飛鳥博物館 2002
『一須賀古墳群の調査Ⅳ』大阪府立近つ飛鳥博物館図録33 大阪府立近つ飛鳥博物館 2004
『一須賀古墳群の調査Ⅴ』大阪府立近つ飛鳥博物館図録37 大阪府立近つ飛鳥博物館 2005
高井田山古墳『高井田山古墳』柏原市文化財概報1995-Ⅱ 柏原市教育委員会 1996

編集後記

今回の紀要は、出土資料の紹介をはじめ、遺跡および遺構の新たな評価や再検討など多彩な内容となっています。これらには、近江の独自性が垣間見えるとともに、幅広い交流の歴史が反映されているようです。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っています。

（編集担当）

平成21年（2009年）３月

紀　要　第22号

編集・発行　財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－2
Tel.077－548－9780（代）
http://www.shiga-bunkazai.jp/
E-mail:mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本　（株）図書印刷同朋舎